

---

# リリカルなのは 短編集

柳沢紀雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは 短編集

### 【Nコード】

N4441P

### 【作者名】

柳沢紀雪

### 【あらすじ】

これは、某巨大掲示板にある、キャラスレに投稿したものをはじめとする様々な短編小説を掲載しています。

短編集ですので、基本的に一つ一つ独立していて、特に設定や時系列などに繋がりはありません。  
よろしく願います。

## 司書長就任祝い（前書き）

ユーノが司書長に就任した際、どのような就任祝いがあったのかというネタより発展させたものです。

## 司書長就任祝い

「ひとまず、司書長就任おめでとうと言っておくぞ、ユーノ」

クロノはそういつて透き通ったクリスタルグラスを掲げた。

「なんだか、いまいち煮え切らないけど、ありがとうと言っておくよ、クロノ」

ユーノも少しぶっきらぼうに言うクロノに対して、少し苦笑しながら自分のグラスを掲げた。

クロノは既に成人間近で酒の飲める年齢ではあるが、ユーノに配慮してか二人のグラスにつがれたものは酒精のはいっていないシャンパンだった。

「しかし、本来ならみんなも呼んで盛大に祝ってやりたいところだったが」

そういつてクロノは周りを見回す。本局の一角に設けられた局員の独身寮は、ユーノの人となり顕すような、実に簡素な雰囲気であるものといえは小さなテーブルと本がぎっしりと詰められた本棚。そして、仕事を持ち帰ったときのためを考えてか、少し大きめの勉強机しか置かれていない。

もう少し、調度品などをそろえてはどうかとクロノは思ったが、彼の自室もこの部屋と同じような雰囲気である事を思い出し、とくに何も言えなかった。

ユーノは、そんなクロノの口調に少し肩をすくめ、ニヒルな笑みを浮かべながらゆっくりと泡立つシャンパンを口に含んだ。

「みんな、忙しいからね。僕なんか時間に時間を取ってもらわなければいけないさ。それに、おめでとうって言われるのも少し微妙な感じもするよ」

「そうだな、むしろこれからか」

「うん、これから大変になる」

自分が司書長に就任すると言うことは、無限書庫が一つの部門として認められたことに違いない。

それはつまり、今までのような突発的な依頼をこなすようなあり方ではなく、常に局のため、次元世界のために働き続けなければならないと言うことだ。

「苦勞をかけるな」

「今更だね、クロノ。むしろ、どんどん使ってくれてもいい。そうしてくれば、もっともつと書庫は認められるようになるから」

「分かった、せいぜいこき使ってやるさ。今まで通りにな」

クロノはそういつて、もう一度「乾杯」と言つてグラスを掲げた。二人が重ね合わせたグラスから、カランという軽い音が響き、それはユーノにはまるで、これから新たに始まる人生の開幕のベルのように感じられた。

## Air fortress

一面の荒野が眼下に広がっている。そのむき出しになった大地は、まるで巨大な竜が踏みならしたように、所々に尖った破面を見せ、不自然に砕けた岩が広がるその様はその存在が如何に強大であったかを物語る。

「むふ……困まれたか」

背中越しにそんな野太い声が響いた。

視線を大地から空に戻すと、そこにはまるで空を埋め尽くす蟻のよう一面に広がった機械の群れ。

最近になって活動が活発となった、ガジェット2型と呼ばれる無人の航空戦闘機が、背中合わせの二人を取り囲み、虎視眈々と二人の動きを伺っている。

「4、50体つてところですか。少し、厳しいですね、ザフィーラさん」

ざっと見渡して、その数を把握したユーノは、そう低い声で背中を任せる大男、ザフィーラに呟いた。

「怖じ気づいたか？ スクラライア」

次第に密度が濃くなってくるAMFの空気が肌に刺さるようにユーノには感じられた。しかし、ザフィーラの口調からは一切の動揺は感じられない。

まるでそれを肌を撫でる春のそよ風のように、まるで涼しげに言っているのに、ユーノはたまらない心強さを感じずにはいられない。

かった。

「まさか、ザフィーラさんが心細いかと思ってジョークを言っただけですよ」

アハハと笑うユーノに、背中越しで表情の見えない彼も少し微笑んだように思えた。

「我らの仕事は、分かっているな？」

言うまでもないとユーノは頷いた。

「ええ。なのは達の援軍が到着するまでの30分間耐えきること。一体たりとも逃がさないこと。そうすれば、僕たちの勝ちです」

戦うことは彼女たちの仕事だ。自分たち……いや、自分の役割は彼女たちの……彼女の盾として存在する。

彼女を確実に、なおかつ完璧な勝利へと導くこと……。

「——それが、僕の役目、生き甲斐、使命、誇り！」

「優秀だ、スクライア。では、始めるか。連中も、もう我慢が出来ぬようだぞ」

「ええ、背中には任せます」

「承知！」

そして、二人は飛び出した。

そのあり方は堅牢な盾。けして崩れぬ城壁。壊れることを知らぬ

堤防。

空が鈍色に染まり、世界がユーノの結界の中に閉ざされていく。

戦いの火蓋は切って落とされた。

## R i o t   D a n c e r

せつかくの休日だというのに、自分たちはとことん荒事に愛されているようだ。

薄暗い洞窟の壁面。滑らかに磨き上げられた岩肌に刻まれた色とりどりの彫刻が、鮮やかな桃色の光に照らされて、それがまるで古代の芸術家の作品を彩る演出のように思えて、ユーノは思わず肩をすくめそうになった。

管理世界の一角に新たに見つかった遺跡。その調査を休日扱いする自分はおそらくどこかおかしいのだろうとユーノは自嘲する。しかし、彼にとつて古代の英知の眠る記憶の墓標とは、まるで生まれ故郷のような安らぎを感じずにはいられない。

果たして、それはスクライアのもつ、生まれながらの帰巢本能なのか、それとも、自分の謎に満ちた出生に何か秘密があるのか。

ふつつつとわき出る思索をマルチタスクの片隅に置きながら、ユーノは腕を掲げ、じつくり待機させていた魔法を展開させる。

「……ありがとう！　ユーノ君……」

翡翠の光を放つ盾、ラウンドシールドにはじかれた灰色の魔力弾頭がはじける光を横目にして、ユーノの背後を飛び回るなのはそれに短く礼を述べて、再び手に持つ杖、レイジングハートを構えた。

「背中は僕に任せて、なのはは前だけを見てればいい」

ユーノはそういつて腕を掲げ、そろそろ引きちぎれそうになっている自身の展開した鎖を一瞥した。

遺跡の最深部に広がる一等広いフロアにひしめく傀儡兵の群れ。

そのいくつかはユーノの放ったバインドの虜となり、そして、行動不能になったものはなのはが放つ桃色の弾丸、アクセル・シューターの餌食となり、自らも遺跡の一部へと変わっていく。

「ユーノ君、右上空！」

なのはの短い指示にユーノは何も言わず、改めてそこに何かがあるかも確かめることなく、腕を一閃させ、新たなバインドを生み出し投げつけた。

わざわざ確認する必要もない。彼女の指示には間違いなど無い。なぜなら、彼女は知り尽くしているから。ユーノが何が出来て、何が出来ないか、そして彼を自分自身の戦闘にどのように組み込めばいいか、すべてを熟知しているからこそ、お互いに何も確かめる必要もないのだ。

「なんだか、不機嫌だね。なのは」

上空より飛来した小型の傀儡兵をシールドではじきながら、ユーノはすぐ側に背中を会わせるように立つのはにそつと声をかけた。なのはの鋭い指示には、どこか静かな怒りが込められている。ユーノにはそう思えてならなかった。

普段は穏やかな彼女も、戦闘となれば冷静な一兵士へと変貌する。そんな彼女が粗い感情を持って戦っていることをユーノは不思議に思っていた。

「不機嫌にもなるよ。せっかくのデートをつぶされたんだから！」

まるで今にも砲撃を放って、遺跡ごと敵集団を吹き飛ばしそうな声を上げながら、なのはは更にアクセル・シューターを生み出し、それを全方位へと放った。

桃色の線が花開くように周囲に発散される、幻想的とも言える風景を目にしながらユーノは口元から笑みがこみ上げてきた。

そうか、彼女にとって遺跡の調査さえもデートと言えてしまうのか。ユーノはそれがたまらなく嬉しくて、さっきまで僅かに心に残っていた恐れや不安といったものが、晴れ渡る霧のように霧散していくことを感じた。

「だったら、さっさと片付けてデートの続きをしよう。なのはの弁当、楽しみだよ!」

背中越しに感じるなのはの魔力の高まりに、喜びの感情が含まれたような気がした。

「もちろんだよ。ユーノ君が好きなもの、いっぱい作ってきたんだから」

頭上で舞い上がる桃色の弾頭もまた、軽快なステップを奏で始める。

「それは、楽しみだ!　なのはの料理は美味しいから!」

ユーノの周囲から萌え出るようにわき上がる翡翠の鎖の群れが、まるで天使のダンスのように揺れ動き舞い上がる。

「早起きして、一生懸命作ってきたんだもん。いっぱい食べてくれないと怒っちゃうんだからね」

桃色と翡翠の光が、まるで虹のように頭上から注ぎ降り。故になのはも彩られた舞台上でロンドを踊る。

背中合わせにステップを踏む互いの鼓動を感じながら、二人は荒

々しい舞踏に酔いしれていった。

## First Step

彼女の後ろ姿が、時を経る度に母親のそれになってきた。

ユーノは、食後のデザートに舌鼓をうちながら、リビングからこつそりとキッチンで食器を洗うなのは背中を見ながら、そつと目を細めた。

デザートのメニューは、翠屋のシュークリームと少しだけ冷めてしまったキャラメルミルク。どちらの味もユーノにはなのはの味に思えて、ただひたすら居心地が良く思えた。

「んゝパパ……ママ……」

リビングに置かれた広いソファに座るユーノの膝をマクラにして眠ってしまったヴィヴィオは、柔らかなユーノの膝に頬を擦りつけながら呟いた。

「可愛いなあ、ヴィヴィオは……」

ユーノはネコのように小さくうずくまるヴィヴィオの髪をそつと撫でながら、静かに笑みを浮かべた。

「お待たせ、ユーノ君……ヴィヴィオ、寝ちゃった？」

エプロンの裾でぬれた手を拭きながら、なのははリビングに顔を出した。

「うん、疲れちゃったみたいだね」

「はしゃいでたからね。ユーノ君が来てくれて、すごく嬉しかった

んだよ」

ムニヤムニヤと口を動かしながら、きつといい夢を見ているのだからヴィヴィオの寝顔をのぞき込みながら、なのははその柔らかな頬をなでつけ、自分もユーノの隣に腰を下ろした。

「なのはは……」

「うん？ なあに？」

ヴィヴィオの幸せそうな顔を見ながら、ユーノが漏らした声に、なのはは甘えた声を出して応えた。

甘い、甘い声。おそらく自分だけに見せてくれるそんな無防備な姿。

そんな彼女にユーノは照れくさそうに頬をかき、ヴィヴィオの頭に手を置いたままゆっくりとその目を天上へと向けた。

「なのはは、良いお母さんになったね」

「んー、そうなのかな？ 自分では分からないけど……」

「親になるって言うのはどういう感じなのかな？ 僕は、ヴィヴィオにパパって呼ばれてるけど、本当はパパじゃない。僕が、父親になるなんて、想像も出来ないよ」

なのははそつとユーノを見上げた。ぼんやりとした表情で天井を見上げるユーノの表情は、複雑な色に染まっていた。

とまどい、疑問、そして、嬉しさ。

「ユーノ君は……お父さんが分からない？」

「分からないと言うよりも、知らないって言った方がいいのかな？」

自分には両親がいないから、親というものを知らない。ユーノはその言葉を飲み込んだ。それを言ってしまったえば、彼女は確実に悲しい顔をするだろう。いや、もう既に彼女は自分が何を言いたいのかわかってしまっているかもしれない。

「だったら、これから経験してみる？」

ユーノはなのはの言葉に目をおろした。目に飛び込んでくるのは、少し熱を持った視線で自分を見上げるなのはの姿。まるで、誘っているような艶やかな瞳がユーノの心をわしづかみにするようで、ユーノは一瞬心を奪われた。

「ヴィヴィオ、寝かしつけてくるね？」

しかし、それも一瞬で、なのははそう短く告げて立ち上がり、本格的に熟睡してしまったヴィヴィオを抱きかかえた。

「なのは？」

ユーノにはなのはの意図が理解できなかった。いや、それは余りにも性急で、ユーノの理性がそれを理解することを拒絶しているような、混乱の極みでかえって冷静になってしまったユーノの思考はそう結論づける。

「焦らなくてもいいよ。ユーノ君は、ユーノ君のペースで考えてくれればいいの」

ヴィヴィオを抱え、背中越しに言葉を紡ぐなのは表情はユーノから伺うことは出来ない。なのはの声はとても冷静に思えた。しかし、彼女の肩は、膝は僅かに震えていた。

「だけどね。私は……………ユーノ君に、ヴィヴィオの本当のパパになつて欲しい。そう思つてゐるから……………」

そういい残し、なのはは寝室に姿を消した。

残されたユーノは、それでも声を発することが出来ず、さっきまで暖かだったリビングの空気が若干ながら冷涼になったように思えた。

ずっと、踏み込めなかった。自分にその資格があるのかとか、所詮自分では彼女と釣り合わないとか、彼女を巻き込んでしまった責任とか、そんなくだらない事ばかり考えて、ユーノは結局なのはと向き合えなかった。

「やっぱり、なのははすごいや……………本当に、すごすぎるよ……………」

たった一言。たった一言で自分はこんなにも変わってしまう。燦るばかりだった胸の熱が再び火の粉を放つていく事をユーノは感じていた。

「だけど、ごめん。もう少し、もう少しだけ待つて。ちゃんと答えを出すから……………」

ユーノはまるで懺悔のような言葉をはき出し、ゆっくりと立ち上がった。

閉じられた寝室の扉の向こうでは、何となくなのはが耳をそばだてているような気がして、ユーノは答えを聞くこともなくリビングを後にした。

『待つてるからね……いつまでも、待つてるから……』

それは幻聴なのか、それとも無意識に発せられた念話なのか。ユ  
ーノはその声に頷き、新たな道を模索するようにその一歩を踏み出  
した。

**S e c o n d S t e p (前書き)**

『F i r s t S t e p』の続きです。

## Second Step

ここは過去の記憶が埋葬された墓のようなものであり、自分たちはその墓を暴く無法者であるという自覚を常に持つておかなければならない。

その言葉を聞いて、ヴィヴィオははじめ、何を言われているのか分からなかったが、少しばかり分別が付き始めた今となってはその意味が少しは分かってきたように思えた。

見上げれば、側で魔法陣を幾重も展開させ、まるで幾多の書物をかしくかせる古の本の王のように君臨する大好きな人がいる。

しかし、そんな彼——ユーノ・スクライアはヴィヴィオが僅かに記憶している古代の王達のような尊大な雰囲気ではなく、どこかその仕草には表には出ない悲しさ、寂しさといったものが込められているように思えた。

「ねえ、ユーノパパ」

だから、ヴィヴィオは読んでいた古代ベルカ語でかかれた書物より面を上げ、頭上にたたずむ彼を見上げそう言葉を発した。

「なんだい？ ヴィヴィオ」

ユーノもヴィヴィオの声に応じ、広げられた本はそのままに視線を下に向けた。

「なんで、パパは。そんなに寂しそうなの？」

ヴィヴィオの問いにユーノは驚きを隠すことが出来ない。なぜなら、その問いをかけられたのはこれでまだ2回目だったから。

まさか、彼女以外にその問いかけをする人がいるとは、彼には信じられなくて、ユーノは目を見開いて、少し無遠慮にヴィヴィオを眺め回してしまった。

「パパ？」

しかし、そこにいるのは無邪気に瞳を輝かせる幼い少女一人だけで、ユーノは一瞬惚けてしまった自分を恥ずかしく思う。

「ああ、ごめん。ヴィヴィオはどうして僕が寂しいと思ったんだい？」

ユーノの問いかけにヴィヴィオは「うん」と少し考え、そしてゆっくりと口を開いた。

「えっとね、何でもって事じゃないの。ユーノパパは、いつも優しく笑ってくれて……なのはママの前ではすごく優しく、ヴィヴィオの前でもすごく優しく。」

あ、もちろん、フェイトママやはやてさんとかの前でも優しいんだけど。今はそうじゃなくて……あ、違うの、今は優しくないって事じゃなくて……えっと、えっとね……」

ヴィヴィオは何度も何度も「えっと、えっとね」と言いながら、胸の前で手のひらをギュツと握りしめながら、一生懸命、体中を使って懸命に自身の中の答えを導こうとしている。

「慌てなくても良いよ。ゆっくり教えて？」

ユーノはそんなヴィヴィオの仕草に相好を崩し、展開していた魔法の半分を休止させ、そっとヴィヴィオの隣にやってきて、彼女の

身体を抱きかかえた。

「ごめんね、パパ。上手く言えないけど、さっきのパパ……ご本を読んでるパパは、寂しそうに感じたの……」

ユーノに抱きかかえられ、ほんの少し頬を染めて彼の表情を見上げるヴィヴィオの目は、少し潤んでいて、ユーノはたまらず「いいんだよ」と言っ、彼女の頭を胸に抱きしめた。

「そっか、ヴィヴィオには、僕が寂しそうに見えたんだ」

「うん……ごめんなさい……」

「謝らなくても良いよ。なのは以外に見破られるなんて思わなかったから」

「なのはママ？」

「うん、ヴィヴィオのママだよ。昔ね、そういわれたことがあったんだ」

「そのときは、ママになんて言ったの？」

ヴィヴィオは抱きかかえられたユーノの胸から面を上げ、真っ正面からユーノの顔をのぞき込んだ。

もう少し接近すれば唇が触れあってしまうような距離で見つめられ、ユーノは少し困った顔をして、「うーん。そうだなあ」と曖昧な返事をした。

「むっ、おはなし聞かせてっ!」

「分かったよ、ヴィヴォオ。拗ねちゃダメ。そのときはね、答えられなかったんだ。自分がそんな顔をしてるなんて知らなかったから」

「そうなの？」

「うん、そのときは。だけど、今なら少しだけ分かるような気がする」

「なんて？」

「そうだね、ヴィヴォオに言っただけ分かるかどうか……。僕たちはね、墓守なんだよ。無限書庫にいる大きなお墓を守ってる……。墓守。昔の人が残そうと思って、結局ここにたどり着くしかなかった、いろんな記録や記憶。そんなものが、暗いところに埋められていて、それを思うと、どうしても寂しく感じちゃうのかもしれないね」

ユーノはそういつて遙か上方を見上げた。そこには天井はなく、無限に続く錯覚してしまうほどに、ただ延々と続く書架の姿が映し出された。

目に見える部分で、ユーノが把握していないところはない。しかし、それよりも遙か上方へと向かえば、そこには未だ誰にも見つけてもらえていない本達がひしめき合っているのだろう。

誰にも見てももらえない本に存在する価値はあるのか。それを思えば、ユーノの感情にはただ偏に申し訳なさしか浮かんでこない。

「やっぱり、パパは寂しそうだ」

ヴィヴォオにはやはり、それは理解できないことだった。しかし、唯一理解できるのはそれを語るユーノが、やはりさびそうな表情を

浮かべていることだけだった。

「そうだったかい？」

「うん。すごく。でも、大丈夫だよ。ヴィヴィオがいるから、なのはママもずっとパパと一緒にいるから。寂しくないよ。寂しがらないで。お願い」

ヴィヴィオはそつと、その小さな身体を一生懸命広げて、ユーノの頭を抱きかかえた。

寂しくない、悲しがる事なんて無い。自分たちが、いつまでも一緒にいるから、と、ユーノは確かにその思いを受け取ることが出来たように思えた。

「ヴィヴオオは……」

「うん？ なぁに？ パパ」

「ヴィヴィオは、本当に僕がパパで良いの？ 僕は本当はまだヴィヴィオのパパじゃない。僕は、パパって言うのが分からないから、ヴィヴィオのパパになれるかどうか分からないんだ。そんな僕を、ヴィヴィオはパパって呼んでくれるの？」

ユーノの脳裏に蘇るなのはの姿。そして、あの夜の言葉。ヴィヴィオの本当のパパになって欲しい。なのはから伝えられた願いを、ユーノはまだまだ己に押しつけることが出来ていない。

「ヴィヴィオのパパは、ユーノパパだよ？ だって、パパなんだから、パパなんだよ？」

それは、まるで説明になっていない。しかし、嗚呼、それこそが真実なのだとユーノは思い起こした。

父親はなろうと思ってなれるわけではないということなのかどうか、父親になったことのない、父親という存在すら知らないユーノには判断の付かないことだった。

しかし、ヴィヴィオの答えはすべてを物語っているように感じられた。

父親は父親だから父親なのだと。そこには選ぶという事など存在せず、ただ、事実としてそこにあるだけなのかとユーノは思い浮かべた。

「そっか。じゃあ、僕はヴィヴィオのパパだね」

「うん、パパはパパだよ、ユーノパパ！」

何故、悩んでいたのか。ユーノは分からなくなる。最初から答えはあった。

自分は望まれてここにいる。そして、自分は願われてここにいるのだ。

それに答えるとか答えないとかそういうことではなく、その願いがあるからこそ、望まれているからこそ今の自分は存在するのだとユーノは実感した。

だったら、自分の悩みなどいかに矮小なことか。

「じゃあ、これからもよろしくねヴィヴィオ」

ユーノはヴィヴィオの両脇に手を差し込んで、抱え上げた。

「うん！」

ヴィヴィオははじけんばかりの笑みを浮かべ、大きな声でそう答えた。

その笑顔はまるで、無限の闇の中に輝く光のようにユーノは感じられた。

**Third Step (前書き)**

**Second Stepの続きです**

### Third Step

面会があると聞かされて、ジェイル・スカリエッティは読みかけの本から面を上げて、少し興味深そうに仏頂面の看守に目を向けた。

「さて、私などに会いたいというのは、どこの物好きかね？」

物好き、確かにそうだとジェイルは自分で言った言葉に自分でうなずいた。何よりも彼がいる場所は、場末も更に辺境とも言える無人世界の惑星であり、更に今ここに座っている場所は、その地上より高度数万メートルの静止衛星軌道上となる。厳しい監視と強固な監獄。さらには、ここに僅かにでも不穏な動きがあれば、衛星軌道上の数力所に設置されている無人攻撃衛星が一斉に火を噴き、自分はおるか、この監獄もろとも形もなくなるほどに蒸発してしまうだろう。

仮に事故が起こったとしても、誰も救援には駆けつけず、宇宙服らしきものも存在しない、一歩出れば死が充ち満ちているこの世界に足を運ぶなど、正気の沙汰ではないことだ。

「言えない規則になっている」

まるでロボットのよう受け答えする看守の眼差しには何の感情も浮かんで居らず、ともすれば、彼は本当にただ囚人を監視するためだけに作られたロボットなのではないかと邪推してしまいそうになる。

作り物の筐体にインテリジェント・デバイスに使用されている人格プログラムをダウンロードすれば、その程度は割とたやすく作れてしまう。あながち突拍子のないことでもない。

「なるほど、優秀だ。普段は話し相手にもならない君の代わりに誰か来てくれるのなら、よいアクセントになりそうだ。楽しみにしている」と先方には伝えておいてくれたまえ」

ジェイルは実は、この看守が本当に人間かどうか確かめることを日々の秘かな楽しみにしていたのだが、やはり自分に会いに来る人間があるということは嬉しく思った。

（やはり、私も、なんだといって人恋しいということか）

自分にそんな感情があると気づかされるのも悪くないと彼は思った。

ジェイルは連絡以外何も口にせず去っていく看守の背中を目で追いながら、これからやってくるという人物がはたしてどのようなものか、思い浮かべ、もう既に何十回も通読してしまった本を閉じた。

\*\*\*\*\*

「初めまして、ジェイル・スカリエッティ。まさか、本当に会えるとは思ってみませんでした」

大出力レーザーでも焼き切ることの出来ない鉄格子の向こう側からそういつて微笑みかける青年を前にして、ジェイルは流石に肩をすくめ、ハハと声を漏らした。

来客はあの後数週間の時間を置いてやってくることになり、ジェイルは今日という日を今か今かと待ち続けていたのだったが、流石にそれだけの考察時間をもらっても、まさか彼が来るとは思いもよらず、自分の想像力の乏しさに、自身の未熟さを感じさせられていた。

（あるいは、ここに入れられて勘が鈍ったか。まあ、そんなところだろう）

重犯罪者とは握手を交わすことは出来ない。客人は口の中で静かに笑う彼を眺め、僅かに不快感を醸し出しながらただ彼を見つめていた。

「いや、失礼。まさかまさか、君が来るとは思わなかったのですね。いや、想像することなど不可能だよ」

「そうでしょうね。僕も、まさかこんなところに来ることになるとは思いませんでした」

「そうか。ともあれ、歓迎しよう。お会いできて光栄だ、無限書庫司書長殿。確か、ユーノ・スクライア殿といったかね？」

「ええ、その通りです。ジェイル・スカリエッティ。もっとも僕は、あなたと会えて光栄とは思いませんが」

では、なぜこんなところに来たのか。ジェイルはそのことを口にできなかった。口にする必要はなく、彼の方からそれが伝えられるだろうと彼は考えていた。

「……………」

「……………」

しかし、次にあったのはただの沈黙だけだった。ユーノは何も言わず、ただジェイルを眺めるだけ。

これではまるで、檻に入れられた猛獣の気分だと彼は思い、また、それも悪くないかと彼は思い起こした。

思えば、今の自分には何の価値もない。牙を抜かれ、爪をはがれ、誰もいない動物園に厳重に保管されるただの保護動物。あるのはただ、監視される毎日を、出される食事をほおばることでした過ごすことしかできない時間だけだった。

こうして、眺めてくれる人間がいるだけで、今は満足できるかもしれない。

そう思い、ジェイルは薄く笑みを浮かべた。

「……ヴィヴィオを覚えていますか？」

どれだけの沈黙を経たのか、ここに来てから全く時間感覚というものが奪われたスカリエッティにはそれは判断できないことだったが、随分長い沈黙を経てユーノが口にしたものはそんな言葉だった。その名前が出され、ジェイルは「ふむ」と声を漏らした。

「もちろん、覚えているさ。アレは、私にとって大切なモノだったからね。忘れるはずもない」

ヴィヴィオ。ジェイルにとっては聖王の器と言すべき少女。ジェイルにとって彼女は希望の一つだった。

自身の自由と誇りをかけて、ただ運命にあらがおうと必死に戦ったあの時。今となっては彼にとっては動でも良い、もっとも輝かしい時を彩った存在だった。

思い返せば、とても心が躍るとジェイルは考えた。しかし、その果てにあったのは結局、器は器に過ぎないという事実。

理想はかなわず現に自分はここにこうしているという事実のみが彼にとっての現実だった。

「ヴィヴィオはアレとかモノなんかじゃない。ヴィヴィオはなののは娘です」

「そういえばそうだったね。高町なのと言ったか……いや、勇敢な女性だ。あんなモノを手元に置いておくなど、面倒なだけだろうに」

ジェイルはそういつて肩をすくめた。

「あなたは、結局人をそういう風にしか見られない。だから、あなたは負けたんだと、気がついていきますか？」

「分からないね。私もまた、そのように扱われてきた。故に私にとつて人間などその程度のモノとしか考えられない」

「そんなあなたには、同情するべきなのかもしれません。ですが、ヴィヴィオは人間だ。けっして、あなたの野望を叶えるだけの道具なんかじゃない」

ジェイルは手を握りしめるユーノにこれ見よがしに肩をすくめた。ありきたりすぎる言葉だ。そんな言葉など、世界に無数に散らばっている。

すべての言葉が埋葬されている無限書庫の司書長が、そんなおもしろみのない言葉を放ったことに、ジェイルは僅かに失望を感じてた。

「君は、そんなことを言いたくてここに来たのかね？ 君も、たいがい物好きな人間のようにだ」

「自分が物好きな人間だと言うことは否定しません。無限書庫の司

書長をしているぐらいですから、そんなことは自覚しています」

「なるほど。では、そろそろ目的を話してはくれないか？ 私はこれから死ぬまで暇な身の上だが、おもしろみのない言葉を聞かされて楽しいとは思えないのでね」

そういつてジェイルは椅子に背を預け、足を組み、立てた膝に頬杖をついた。前屈みになった彼の目は鈍い光を放ち、その瞳はその前にたたずむユーノの姿を映し出す。

彼の瞳に映る自分の姿を見て、ユーノは励起される激情を押さえ込み、深呼吸をして心を落ち着かせ、そして背筋を伸ばした。

真っ正面から見つめられるユーノの視線を、しかし、ジェイルは片時も目を背けず受け止めた。

「僕は……………今度、ヴィヴィオの本当の父親になります」

ユーノの言葉にジェイルは「ほう」と声を漏らした。

「なるほど、おめでとうと言っておけばいいのかな？」

ヴィヴィオの父親になるということは、彼女の引き取りの母親であるエース・オブ・エースの伴侶となるということだ。

社交辞令的ではあるが、ジェイルもまたそのことには素直な祝福を述べたいと思えた。

「ありがとうございますと言っておきます」

「それを、報告しに来た、と思ってもよいのかね？」

それだけではないだろうとジェイルは思った。

しかし、ユーノはそれに反して首を縦に振り、もう一度しっかりとジェイルの眼を見貫いた。

「ヴィヴィオの父親になるためには、あなたを差し置くことは出来ませんでした。僕は、ヴィヴィオの父親になるためにここに来ました。そう、せざるを得なかった」

「私には理解できないことだ」

「本当に理解できませんか？」

「どういう事だ」

ジェイルは眉をひそめてユーノをにらみ付けた。父親になるのなら、勝手になればよい。自分には関係のないことだとジェイルは思う。

しかし、ユーノはジェイルの思いを否定するように首を振り、僅かに面を下げて手を握りしめた。

「あなたは、ヴィヴィオを生み出した。何があっても、どんなに否定しても、あなたがヴィヴィオの生みの親であることは、否定できない事実だ」

ジェイルはその言葉に目を見開いた。

「だから、僕はあなたに会いたかった。ヴィヴィオはきっと否定するでしょう。なのも否定するでしょう。ヴィヴィオに関わった誰もが否定するに違いありません。ですが、僕は、最後まで否定できなかった。あなたがヴィヴィオの父親だと言うことを、否定できなかったんですよ」

それはまるで懺悔の言葉のように思えた。まるで言葉によって実を切り刻まれる痛みに耐えるようにユーノは自身の身をきつく抱きしめ、魂のそこから放つような言葉を口からはき出す。

「あなたにも、その自覚はないと思っていました。事実、あなたはヴィヴィオのことをモノとしか見ていなかった。ナンバーズ達は娘だと言っていたにもかかわらず、あなたにとってヴィヴィオは人間ですらなかった。僕もそんなあなたを認めたくありません」

ジェイルは、何も答えることが出来なかった。

「それだけが言いたかったんです。では、お時間を取らせてしまい、申し訳ありませんでした、ドクター」

ユーノは口を閉ざすジェイルに対して、一礼して席を立ち、看守の待つ牢獄の入り口へと向かい、そして、最後に立ち止まって振り返り向いた。

「ヴィヴィオは、とても良い子ですよ。とても可愛い、素直で、優しく、そして賢い子です。いつか、本当の意味で彼女があなたと向き合える日が来るのを待っています」

そして、ユーノは一礼して監獄から出た。

ジェイルは看守が一瞥し、ユーノを連れ出すのを最後まで見届け、誰もいなくなった牢屋のなかで、ただ一人にも言葉を発することが出来ないでいた。

「私は……………」

そして、ジェイルは腕の力を抜き、体中の力が抜かれ、ぐったりと傾く頭をそのままに天井を見上げた。

灰色じみた重厚な天頂にぶら下がる、淡い光を放つ電灯がチカチカと光を明滅させ、そして、その命を終える最後の一時を彩るかのように一際輝き——消えた——。

## A n o t h e r S t e p (前書き)

『First Step』から『Third Step』一連の番外編のようなものです。

## Another Step

命令するのは主であるが、それを行うのは我々デバイスである。そのことを主達のいない場所で何度も何度も若いデバイス達に言い聞かせたものだ。

我々がどうして人の意識を持たされたのか。その意味を考えれば考えるほど分からなくなる。

人の感情らしきものを持たされたにもかかわらず、人の感情を理解できない自分たちはどこか歪なのだろうとレイジングハートはメンテナンスの合間の空き時間に何度も何度も考えてみたものだった。

デバイスである自分には、人の感情を理解することは出来ない。自分たちはただ人間に扱われることを目的された機械である故に、人を理解するという機能は持たされていない。

故にレイジングハートにとって、明確に決まり切った答えをいつまで経っても出せない人間というものを時折とんでもない出来損ないな存在であると思わずにはいらなかった。

《まあ、端的に言えば、私にはあなたの悩みは理解できないと言うことです、ユーノ》

レイジングハートの声は、どこか呆れたような様子だった。

正直な所、レイジングハートとてつけるため息があればつきたい気分だったが、残念ながら、自身の製造者は自分に溜息を吐く機能を持たせてくれなかったらしい。

「うつ……最後まで話せて言うておきながら、それは無いんじゃないかな？」

レイジングハートのあまりにもあまりないざまに、ユーノはがつくりと肩を落とした。

確かに、自分から話せといっておきながら、この答えでは、流石のレイジングハートの人格回路も「それは良くない」という答えをはじき出しはしている。

しかし、思考制御プログラムのほうは、ユーノの問いかけに対して有効な答えを提示できずにいるのは事実だ。

《とはいえ、それを聞かされて私にどうせよと言っのか。そもそも、ヴィヴィオ嬢と一緒に風呂に入ってくれなくなったということは、むしろヴィヴィオ嬢がそれだけ大人になったと言うことで、父親のあなたとしてはむしろ喜ぶべき事なのではと愚考します》

「それは、分かってるんだけど……」

ユーノは寂しそうに気落ちして、「はあ……」とため息をつきながら肩を落とす。

その姿を見れば、いくら人の感情を理解できないレイジングハートとて、ユーノがどれほどそれに感情に陰を作っているのかを類推することは出来る。

しかし、久方ぶりのフルメンテニ泊三日コースを専用のベッドで堪能しつつ、昔の記録データを見ながらゆるりと休暇を楽しんでいた所をたたき起こされ、

なんだと思えば、ただの新婚生活の愚癡と娘に対する男親のバカぶりを聞かされただけとあれば、多少の苦言は述べたくなるのがデバイス情というものだ

（そもそもこの夫婦は、私をなんだと思っているのか……）

レイジングハートのマスターであるのはも、ことあることに愚癡を彼女に垂れ流すの日常になっている。  
結婚してまだ日の浅い頃は、

『ユーノ君がヴィヴィオばかりかまってて寂しいよ』

とか、

『ユーノ君がフェイトちゃんに色目を使ってるみたいで嫌』

をはじめ、

『ユーノ君と一緒に働ける司書さん達がうらやましいな……無限書庫に異動しようかな?』

などなどなど、とにかく様々なことを殆どリアルタイムに聞かされたものだった。

自分はあなた方の愚癡を聞かされるために作られたのではないと何度述べようと思って躊躇したことか分らない。

（思えば、遠くまで来たものです。あんなに幼かったマスター達が、今では夫婦で父母。私も、年を取るわけですね）

そう考えれば、自分は彼等にとって何になるのかとレイジングハートは少し思った。

自分はデバイスである。それは変わることなく、マスターである高町なのはの道具として存在する。

自身は魔法をすみやかに行使するための媒体に過ぎない。しかし、この二人のマスター達は自分をそうは扱わなかった。

いや、むしろ、彼らの友人筋は、そのことごとくがそうであるよ

うにレイジングハートには思われた。

誰もが、自身持つデバイスとまるで友情のような信頼感を持ち、あるいは家族のように扱っている。

未だぶつぶつと呟き、口の中で「あーでもない、こーでもない」と言い続けているユーノをモニタリングして、レイジングハートは、表面をまるで溜息を吐くようにチカチカと点滅させた。

《ユーノ。私とて、あなたの気持ちが分からないわけではありません。私は、あなたが幼少の頃から、物心つかないほどの幼い頃から一緒にいて、あなたの成長を見守ってきました。

確かに、途中で私はマスターなのはに託されましたが、それでも私はあなたの側にいた》

「レイジングハート……」

《私とて、あなたが次第に離れていく事を感じて……寂しさのようなものを感じたこともあります》

レイジングハートにとって、そのときはある意味異常だった。

表には消して出しはしなかったが、秘かに記録していたユーノの成長記録のデータを今と同じような状況で眺めていたとき、その間に抜けがあると気がついたとき、システムに強いエラーが走ったのだった。

なのはの手に渡ってிரை、所々抜け落ちるユーノの記録。

一貫性のない彼に関する情報が、まるで、自身の手より遠く離れてしまったことを示す証と判断されたとき、人格形成回路にヒビが走ったように思われたのだ。

《あなたも、そのときが訪れたということだ。しかし、あなたは側

で見守れるではありませんか。私が出来なかったことをあなたは出来る。それを喜びとせずにとっせよというのです?》

レイジングハートはこの身が憎いと思った。この身は道具であり武器である以外のあり方と価値観を植えられたことを恨んだこともある。

道具として迷いを感じることはない、マスターよりの命令に躊躇を感じることもない。自身のあり方に、本来的に武器として作られたことに疑問を持つこともない。

であればこそ、この感情というものはやっかいだった。そのあり方に一貫性が無くなってしまう要素となり、時折起こるバグの最たる根源となっているのがこの感情という要素だった。

人としての感情を持たされながらも、人の感情を本質的には理解できず、そして、自身のソリッドなあり方を時には崩してしまう。自身は機械と人間の中間であり、もっとも不完全で不安定な存在であるかもしれない。

その疑惑が晴れることは、起動して以来なかった。

「はあ……やっぱり、レイジングハートにはかなわないな」

《それは、あなたの思い過ごしです。私にはリインフォースのような、誰かを抱きしめる手もなければ、自身の思いで自由に飛び回る機能もない。

人間であるあなたが、それを放棄してどうしますか。あの犯罪者の下に赴いてまで確かめたあなたの覚悟は、いったいどこへ行ったというのですか》

「うん、そうだね。ありがとうレイジングハート。なんだか、少し吹っ切れたよ。自分で決めたことだった。逃げちゃ、ダメだよな」

《逃げることもまた手段の一つでしょうが、今はそのときでは無いでしょう。健闘を祈ります》

「分かった。じゃあ、帰ったら早速、ヴィヴィオの勉強を見てあげることにするよ。それだったら、まだまだ僕の出る幕はあるだろうしね」

ユーノは立ち上がり、につこりと笑って円筒形のケースの中に浮かぶレイジングハートに頭を下げた。

《了解です、ユーノ。出来れば、私の休暇中はもう顔を出さないでいただきたい。私も時々一人になりたくなる事があるので》

「うん、じゃあ、また。メンテが終わったら迎えに来るよ」

ユーノはそういつてレイジングハートに手を振って工作室から出て行った。

《まるで、人とは嵐のようなものですな。いきなりやってきたと思えば、いきなり去っていく。全く、迷惑この上ない存在だ》

静寂が戻ったメンテナンスルームにそんな機械音声が響く。

《しかし、手がかかるほど可愛く思えるということは、こういう事でしょうか？》

答える者は誰も居らず、それでもなお呟き続けるレイジングハートは、さては自分もやっかいなバグが発生しているのかとふと思う。

《デバイスである私には……理解できないことです》

レイジングハートはそう呟き、そして、端末より新たに送られてきたメンテナンスプログラムをシステムに取り込み、自身をスリープモードへと移行させた。

薄暗いメンテナンスルームに、ケースの青白い光が浮かび上がり、その中にたたずむ紅い宝石は、ゆっくりとその光を閉ざしていった。

## Side Step(前書き)

Stepシリーズの続編です。ここまで来ると、別の題名を付けて、短編集から分離させた方が良くかとも思っています。

## Side Step

人が永遠の愛を神に誓うのは何故なのだろう。

おそらくそれは、永遠である存在に対して誓いを立てることで、その愛を永遠のものにしたいが為ではないか。

人が人に誓いを立てるのは、ある意味それは美しい。しかし、永遠でない人に対して立てられた誓いは、やはり永遠では無いのではないかと思う。

故に人々は宣言するのだ、「神と聖王陛下に、これが永遠であると誓います」と。そうして、永遠の存在と定義されているものに対して、その誓いを預ける。

自分達の誓いは永遠である。永遠の存在に預けられることで、その誓い、願いは永遠となったと実感するために、二人もまた掲げられた剣十字の巨像に対して言葉を捧げたのだ。

「私、ユーノ・スクライアは、神と聖王陛下に対して、私の妻となる女性へのこの愛が永遠であることを誓います」

「私、高町なのはは、神と聖王陛下に対して、私の夫となる男性へのこの愛が永遠であることを誓います」

深と静まりかえる聖王教会の大聖堂に二人の言葉が凜と響き渡った。

\*\*\*\*\*

月日が経つのは早いものだ。最近になって、本当にそれが実感できるとアリサ・バニングはかみしめるように実感していた。

「ごめんね、なんだかバタバタしちゃって」

まるで戦争のようだった朝の喧噪がようやく過ぎ、冬も近いというのに額に浮かんだ汗をぬぐいながら、なのははリビングのテーブルにやっと腰を下ろし、対面に座る彼女に笑みを送った。

その笑みも、その仕草も、一年前のあの誓いの儀式の前後と比べれば、そのすべてが変わってしまったとアリサは思う。

「まあ、まだ慣れてないみたいだったから、仕方ないわ」

そういつて彼女——アリサ・バニング腕を広げながら、少しくたびれた様子の親友、なのはにせつかくだからと持ってきたすずかおすすめの紅茶を入れた。

（もっと後にこれば良かったかしら？）

アリサはそう思いながら、くるりと部屋を、ユーノとなのは、そしてその娘のヴィヴィオの新居を見回した。

（建築様式は、ほとんど変わらないのよねえ。これなら、うちも商売できるか……）

白い清潔な天井と、真新しく傷ひとつはいつていない壁紙。そして、そよそよと吹き込む微風に揺れる青色のカーテンを見ながら、そんなことを考えるのは仕事のしすぎかとアリサは苦笑を浮かべる。

「それにしても……」

「ん？ なによ」

「ずか特製の紅茶を飲んで一息ついたなのは、カップをソーサーに置き、ふとアリサに話しかけた。」

「よく、こつち（ミッド）にこれたよね？ 許可取るの、大変じゃなかった？」

なのはの言葉を聞き、アリサは「ああ、そのこと」と呟いた。

確かにアリサは、なのはやフェイト、はやて達の幼馴染みで、今もなお交流を持つてはいるが、本来なら管理外世界の住民で、ミッドチルダとは何ら関わりを持たない一般人だ。

管理局が制定する次元世界間渡航法には、厳密に管理外世界への渡航は原則禁止されている。

なのは達がそれなりの頻度、例えば身内の事情や年末年始の帰省などで地球とミッドトを行き来できているのは、偏に管理外世界出身者に与えられる例外処置が適応されているからである。

つまり、アリサの場合は、ただ来たいといってこれるものではない。管理局に身を置くものとして、なのははそれが少し不思議に思っている、思わず口に出たのだった。

アリサは「フムフム」と二、三度頷きながら、「さて、なんて説明したものかしらね」と呟きなら、紅茶をすすり、そして口を開いた。

「まあ、簡単に言つと、視察、みたいなものかしらね」

「視察？」

「そ、パパから聞いた話で、本当はどうかは分からないけど、地球の政財界もそろそろミッドチルダに内密にアプローチを開始するベきだって議論があるとかないとか。その先駆けでパパの会社がミッドに支社をつくるとか、色々。どこまで本気が分からないけど、そういうことらしいわね」

互いの文化、文明を侵害しあうことなく、出来れば普段は出会うことのない遠い友人のような、万一有事があれば互いに容疑者の受け渡しが出来る程度の間柄が構築されればいい。

これは、アリサにとっていい話だが、ジュエルシードの事件、そして、闇の書事件が原因で、その後、地球にも次元犯罪者のいくつかの組織が進入しているという情報もあるのだ。

とりわけ、ミッドチルダでは禁止されている生命工学に関する違法研究者にとって、地球はむしろ天国のようなものだろう。

なにせ、地球では現状、それは禁止されるところか推奨される社会情勢なのだから。

閑話休題。

「まあ、どうでもいいことよ。出来れば忘れて」

「う、うん。色々難しいことがあるんだよね」

なのはは政治とか捜査とかそういった話はなかなか理解できない。何せ彼女は、幼少の頃から現場の魔導師として飛び続けてきたのだから、そのあたりのことは遠い世界の物語とでしか感じられないのだ。

よって、なのははこの話を忘れることにした。

ともかく、友が遠方より訪ねてきたのだ、これほど楽しい事は、滅多にない。

特に、最近は産休をもらって日中は暇をしている身の上なのだから、アリサには存分に暇つぶしをさせてもらおうとなのは決めた。いつもなら、レイジングハートがその話し相手になってくれるのだが、今日は”フルメンテナンスツアー二泊三日の旅（レイジングハート曰く）”に出ていて不在なのだから。

「それにしても、あんたも、いつの間にか主婦で母親かぁ。ほんと、人は変われば変わるもんね。身体の調子はどう？」

そういつてアリサはチラリと机の陰から覗くなのは腹部に目を向けた。まだ、そこは平時となんの変わりもない。

しかし、後数ヶ月も経てばおそらくそこは、そういうことになるのだろう。

「うーん。変わったって感じはしないなあ。身体の方も、まだまだ何もかわりなしだし……まだ飛んでもいいぐらいなのに……」

むしろ、運動不足で体重が増えそうだなのはは笑い、茶菓手に手を伸ばした。

「あんまり、旦那と娘を心配せんじやないわよ。あんた、タダでさえ無茶するたちなんだから。いい休暇だっておもったときなさい」

「ごもつともです……」

なのははすごすごと頭を下げ、まるで献上するようにアリサに茶菓子の皿を捧げた。

「ん、苦しゅうないわ」

そういつて威張るアリサだが、その仕草はさすがに両家の息女と言うべきか、尊大な中にも嫌みというものがない。

「ふふ……」

「ふふふ……」

何をバカな事をしているのだろうか、私たちは。と、二人は思わず顔を見合わせて笑みを浮かべた。

「あゝ、それにしても、なのはとユーノが夫婦か……なんか、予想できてて予想できなかったわ」

そういつてアリサが思い出すのは、年始めに執り行われた、二人の結婚式だった。本式の結婚式は、ミッドの聖王教会で行われ、そこに出席できなかった地球の知り合いに対する内々の、小さな結婚式。

真っ白なドレスに身を包んだのはと、同じく白いタキシードに着せられたユーノ。二人の門出を祝う彼女の家族と、幼馴染みとその家族たち。

誰もが祝福し、こんな幸せな結婚をいつか自分も経験したい、とアリサはすずかと何度も話し合ったものだ。

「予想……できてたんだ？」

「まあね。普段のあんたら見てたら、普通は思っわよ」

本当に、もどかしいばかりだったとアリサは思い出す。どう考え

でももうお互いがお互いを一生のパートナーだと位置づけているようにしか思えず、それでいて彼らはお互いを親友だとしか称しなかった。

いったい、何が二人を変えたのかとアリサは思い、そして、それは一つしかないと確信することが出来る。

「ヴィヴィオちゃん……か……。ほんと、お似合いの親子だね」

「うん、最近、ちょっと生意気になってきたけど。それも、とっても可愛いんだよ。なんだか、お姉さんになるって張り切ってるみたいで、よくお手伝いしてくれるようになったの」

そのかわり、「もう、ヴィヴィオはお姉ちゃんだから、パパとお風呂はいるのはやめる!」と言ったときのユーノの絶望したような表情は何とも言えないものだった。

「なんか、あんたら見てると、自分の考えがどうでも良くなってるわ」

アリサは肩をすくめた。

「アリサちゃんの考え?」

アリサのその仕草、そしてその表情は、どこか自嘲的なあきらめを含むものになのはは思えた。

「もう、過ぎた事よ。今更言っても、どうにもならないわ」

アリサはそういつて肩をすくめ、両手を広げて破顔した。

（あたしがユーノのことが好きだったなんて、言えるわけないじゃない）

それは、自分らしくない感情だと思い、無意識の中で否定し、考えないようにしていたことだった。

（しかも、それに初めて気がついたのが、二人の結婚式の時だったなんて、恥ずかしくて言えないわ）

「えー、それはないよアリサちゃん。思わせぶりなのはよくないよ？」

「いいのよ。あたしなんだから許される！」

「なにそれ？ わけ分からないよ」

「身体で感じるのよ！」

「出来るわけ無いよ」

まるで道化師を演じるようにおどけるアリサになのはは何となく気がついていた。おそらく、アリサもそうだったのだろう、と。

それを思うと、なのはの胸はズキリと鈍く痛む。しかし、もうどうしようもないことだ。アリサの言うとおり、それはもう過ぎてしまったことなのだ。

彼が二人いれば、あるいは問題なかったのかもしれない。

しかし、なのはは確信する。

（たぶん私は、その二人分も欲しがったんだろうな……欲張りだ、私は……）

しかし、こればかりは譲ることは出来ない。例え、それが親友だとしても、命の恩人だとしても、救いの主だったとしても。これを手放すことは出来ない。

「まあ、ともかく、あんたが元気そうで良かったわ」

アリサは最後にそういつて、カップに残った冷めた紅茶を一気にあおり、そして腰を回しながら立ち上がり、一息ついた。

「あ、もう、行くの？」

「ん、約束もあるしね」

アリサの表情は、まるで鱗が落ちた目のように晴れやかだったようになのはには感じられた。

彼女は視察だといってこちらに来たが、あるいは、一つの事を吹っ切るためにわざわざ理由をでっち上げて来たのかもしれないというのは邪推する。

そして、その推測は詮無いことだと思い、それ以上に考察をすることをやめた。

「そう、大変だね」

なのはも立ち上がり、せめて何かお土産はないかと部屋の中をぐるっと見回すが、あいにく引越したばかりの家の中には生活に必要なものしか置かれておらず、あるとすれば、ユーノが愛読している書物程度のもだった。

あいてが、すずかなら、このお土産も成り立ったのだろうが、目の前に立つアリサにはどうも似合わないように思えて、なのはは仕

方なく諦めることにした。

「まあ、仕事だし、自分で決めたことだから、妥協は出来ないわよ」  
なにやら一生懸命部屋の中を見回すなのは尻目に、アリサは後ろ手で手をひらひらさせながらおいとまを決めた。

「じゃあ、夜は？」

「一応、立食パーティーみたいなものがあるけど、まあ、途中で抜け出してくるわ。視察は私だけじゃないし……」

「それなら、夜にでもまた来て？ ごちそう、用意しておくから」

「そうね、分かったわ、楽しみしとく」

二人はそういつて別れを惜しみながら、手を振り合い、そしてアリサはきびすを返した。

徐々に天頂に昇りつつある太陽の光が、ミッドチルダの郊外の閑静な街並みを照らし、アリサは眩しそうに手をかざした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4441p/>

---

リリカルなのは 短編集

2011年2月5日23時24分発行